

何でも初めての仕事に手を着けるといことは容易なものではない。周囲の人の懸念とか批判とかいうものが随分騒がしいものであるばかりでなく、当人自身だって相当薄気味悪いような剣呑さを感じることだろう。そういうことは大抵の発明家や改革者などが経験していることだろうと思う。酒間の下物として美味いという海鼠なども、これを初めて食い出した人は一体どんな人だろう。あの風体を見れば随分度胸もなくちゃ口へ入れられたものじゃないう。コロンブスの卵という話もある。他人のやったことを評したり追隨したりすることは誰でもやれるが、未開拓の分野に手を着けるといことはとにかく余程の意志力を必要とするものである。

明治の維新がただ政体の改変であつたばかりではなく、おそらくあそこを経界として百般のものが一新したといつてもよいくらいである。もちろん文化の伝播役である文字の書き方なども、この埒外にあり得よう筈はなかつた。しかし政体上からの御維新は、そのよつてくるところがおおむね国史への目覚めと、それに加えて対外の諸問題等が遠因近因をなしているのに比べて、文字の書き方すなわち書道の方は遠因といわず近因といわず仮名の方を除いた全部が、ほとんど支那に改革の素因を求めているのは、あたかも兵術の部門が西欧の型式に倣つてあらたまつたのと相似た感がある。ただ書道の方は最初の輸入元の古典に資料を求めたところが、いささか特徴であるといえよう。総じてあの維新の百般がその歴史の再検討を土産としていることは同じであり、そしてまたその改革の困が早く徳川中期ごろから発生しかけてきていることも、全く軌を同じうしているのである。

南朝に尽して北国に落ちた世尊寺行房卿に書法を問いて、出藍の名をほしいままにせられた伏見天皇の皇子、尊円親王の流儀、すなわち御家流ほど汎く民衆的に普及したものは実に空前であり、また絶後である。これにはいろいろ弘まるべき好条件が多々備わつていたのであるが、それはしばらくおいて、そのご在世から百数十年後の徳川期に入ると、とにかく公儀の文書がこの書風でなければ通用しないとまでになつてき

たのである。したがつて横丁に住んでいた瘦浪人のわか師匠や寺小屋の手下がこの一風に統一されて、楽々と糊口の資を給し、また洩たれ小僧の草紙を染めていたのである。しかし手下によつて葫蘆を書いていれば必然的に陳腐となり生気を失うのはやむを得ない。徳川末期の高札や証文などに表れているこの御家流の文字を見たらば、おそれながらで始祖の尊円親王さまでもおそらく啞然とあそばされる程度のものであらう。

日本の大抵のものがさうであるように、書道の流派も古い歴史を持ち始めると、師匠の米櫃、すなわち生活権擁護のため案出された秘伝、口伝といったようなものが盛んになり、様式化するにしたがつて個性の匂いなどというものは大体忘れられてしまつたのである。つまりこうして頽廢期に入つてくるのである。しかしてその次に起こつてきた新鮮なる発生は、尊皇倒幕論の発生箇所と同じく比較的拘束の少なかつた儒門の人々から展開されてきたのである。

売の家と唐様で書く三代目——という川柳は、創業の辛酸が忘れられる三代目あたりの道楽息子から、そろそろ大身代も傾きかけるんだと諷したものであつたが、そういう呑気坊ちゃんは大體四角い漢字が町人には不相応に読めて、儒者やら俳諧師やらに交際があり、商売往来で習つた御家流は風流畑に無粋とあつて斬新で氣どつた唐様を習う。やがて白鼠が身代を食つて裏店へなどというのである。とにかく御家流一派の和様に對して、いささかでも支那法帖の調子を取り入れたものを唐様と呼んでハイカラがたつたことは事実である。いつの時代でも革新家は必ず熱情家であり同時に相當のハイカラ屋でなくてはならぬ。つまり新鮮への憧れを持つ者でなくてはならないのだ。ただしここで一言お断りしておくことは、この和様を代表する御家流および仮名の存在が無かつたといふであつたとしても、ある時期までは全然これ以外の存在が無かつたといふのではない。いわゆる唐様なるものも僧門ことに黄檗やその他の禪門の人々、または昌平黌の儒官などにもチラホラ無いではなかつたのだ。が、これが長崎仕込みの明、清風を超えて、宋、唐、漢人あたりの名蹟拓本等へさかのぼつて深く研究せられたのは、ほぼ文化・文政ころからのことであらう。

(つづく)

〔紀元二千六百年〕昭和十六年